

『韓国人から見た北朝鮮』

呉善花 著

講師：呉善花（拓殖大学日本文化研究所客員教授／GLOCOM客員研究員）

2003年12月4日に^{オ・ソンファ}呉善花拓殖大学日本文化研究所客員教授・GLOCOM客員研究員による『韓国人から見た北朝鮮』の読書会が行われ、時機を得たテーマについての解説の後、熱心な質疑が続いた。以下は、在日27年の知日派でもある呉善花氏による講演の概要である。

1. 北朝鮮に対するイメージについて、日本では2002年の日朝首脳会談での拉致事件発覚以降、悪いイメージと不信感が増幅しているのとは全く対照的に、反日反共の軍事政権が長く続いた韓国では、1998年に発足した金大中政権の太陽政策以降、北に対する恐怖感が薄らぎ、むしろ同胞民族としての親近感から親北のムードへと変化してきている。特に2001年の南北首脳会談での、年長者に対する礼儀をわきまえた金正日の態度によって、韓国では好印象が広まった。核問題についても、同一民族に対して核を使用することはあり得ないと信じている人が韓国では過半数に達している。さらに2002年9月のアジア大会での美女応援団に対し、伝統的な韓国美人の清楚なイメージや統一行動について追っかけファンクラブができるなど話題沸騰した。このように日韓の間では、北朝鮮に対する世論の対応が大きく違ってきている。
2. 朝鮮半島では、14世紀末以来518年も続いた李氏朝鮮が、それ以前の高麗の仏教色を払拭し、現世主義的な儒教イデオロギーを推し進め、自民族優先主義(ethnocentrism)や嫉妬深い中央集権主義を実現し、小中華思想によって、日本に対し一貫した侮日観を採ってきた。「衛正斥邪」は日本の尊皇攘夷に相当する。実は北朝鮮のみならず韓国にも、この儒教的な伝統は多く残っている。北と南とでは、首から上は社会主義と資本主義の違いはあるものの、首から下の社会的な倫理や意識の構造は共通している。自民族を自画自賛し、国際結婚を民族の血を濁らせるとして否定し、父系の縦社会の孝を重視する、ハナム(唯一様)・ハヌム(天様)という家父長的な国家観などのルーツは、まさに儒教=天命思想にある。北朝鮮のチュチェ思想は、いわば儒教をより極端に体系化した社会主義版といえる。また言語についても、日本語以上に漢字中心の伝統を捨てて、ハングル専用の言語にしたことも自民

族優越主義と関係がある。特に漢語のもつ抽象的な語彙を失ったことによって、日常会話から離れた議論や、文学・歴史の理解などが不得手となっている現実には南北に共通している。

3. また文化の面では、左右対称を好み、統一的な美意識や色彩感覚を持つことについては、家や首都の作り方から食器や化粧や衣装のみならず、満月や満開を愛でる気持にまで現れている。「八方美人」という言葉は、韓国語では、日本語にあるような否定的なニュアンスがなく、外見も内面も完璧な美人を意味する。
4. 韓国にとっての北の脅威とは、核でもミサイルでもなく、体制が崩壊して2,000万人を韓国が丸ごと抱える事態になることである。そうならぬためには、北に経済援助をしつつ軍縮を進め、開放経済に移行させるしかない。これは崩壊しようとしている北の体制を崩壊させないというジレンマなのである。
5. 日本は、技術大国、経済大国であると同時に「芸術大国」であることをもっと自覚すべきである。茶の湯などに典型的に見られるように、日本の文化には、素材の重視、自然との一体感、揺れ動く曖昧さへの価値観がある。そこに未来を創造する力があるのではないだろうか。これからのグローバルな社会においては、欧米的な日本、アジア的な日本に加えて、東アジア文化の底流にある無意識な「縄文的」あるいは「前アジア」的な発想・視点が、未来を切り開く新たな第三の軸になり得るのではないかと。

小林寛三(GLOCOMフェロー)